

漆黒鴉学園4

第一章 虎視眈々

一話 一抹の不安

今日の一、二限は、全学年参加の体育祭合同練習だった。

練習中、頭を打って保健室に運ばれるというハプニングに見舞われたものの、私は三限の授業に無事出席することができた。

「宮崎音恋さん」

名前を呼ばれ、前回の小テストが返される。私の結果は満点。点数に満足して席に戻る途中、斜め前に座る親友の姫宮桜子が目に入った。彼女はがくりと項垂れている。どうやら、テスト結果が悪かったみたい。

サクラは、独りでいることの多かった私に初めてできた親友だ。さつきも、保健室に運ばれた私を心配して、真っ先に駆けてきてくれた。

キラキラしてて温かくて、まるで太陽みたいなサクラ。

私は、大切なサクラの——このゲーム世界のヒロインの幸せを誰よりも一番に願っている。

この世界は、実は前世の私がプレイしていた乙女ゲーム『漆黒鴉学園』の舞台なのだ。私はそのゲーム世界に脇役の宮崎音恋として転生していることに、高等部の入学式に気が付いた。

とはいえ、脇役は脇役らしくヒロインの恋を見守りつつ、平穏で平凡な人生を送ろう——
そう思っていたら、この世界は、前世の私の生き方に感銘を受けた神様が、私の幸せを願って与えてくれたものだと思われた。大好きだったゲームのヒロインに成り代わり、攻略対象者と幸せになれる世界。けれど、私はそんなことは頼んでいないし、本来のヒロインであるサクラの幸せを奪うようなことは望んでいない。

だから私は、大切なサクラのシナリオを守るためこの学園を去ることを考えた。でも、そんな私の前に現れた、全ての原因である神様は、私の人生を自由に生きろと言う。せっかくの舞台をサクラと一緒に楽しんだらいいと……

そのせいで、私の中にこれから起こるはずの大好きな夏休みのイベントに参加したいという気持ちが芽生えてしまった。

ここで夏休みを迎える。親友のサクラと一緒に。

斜め前の席に目を向けると、授業が始まって、サクラはまだ落ち込んでいる様子だった。でも、私の視線に気付いて、にっこりと笑った顔を見せてくれる。眩しいキラキラした笑顔。

私も口元を緩ませて、笑みを返した。

サクラと一緒に、夏休みのイベントを楽しみたい。その思いが強くなる。
どれほど楽しいだろうか。

どれほど幸せだろうか。

けれど、その前に一抹の不安がよぎる。

さつき、保健室を出た私が出た後島光也。彼はモンスターを狩るハンターなのだ。元最強のハンターでもある、養護教諭笹川仁先生の愛弟子の一人。彼はここへ獲物を追って来たと言っていた。相棒の東間紫織と共に。

ゲームシナリオでは、後島光也と東間紫織が登場するのは二期になったからのはずだった。

これは、明らかにイレギュラー。

神様の贖罪を受けてこの世界に転生した私の存在、そして、前世の記憶を持つ私がゲームとは違った選択をすることで、少しずつシナリオが変わってきてしまった。

東間紫織は、笹川仁の後を継いで現役最強のハンターとなっている。彼女が追っている獲物となれば、恐らくとても危険なモンスターだろう。そんなエピソード、ゲームの中にはなかった。前世の記憶を持っている私にも、この先のシナリオがどうなるかわからなくて、少し怖い。はたして無事に、夏休みのイベントは迎えられるのでしょうか……

二話 三百歳の吸血鬼

その日の昼休み。生徒会室に関係者が集まった。
関係者とは、この学園の秘密を知る者。

漆黒鴉学園は、人外の子どもの達のために設立された学園なのだ。彼らは正体を隠し、人間の姿で人間と共に学園生活を送っている。そして、学園の女子生徒から絶大な人気を集めている容姿端麗な生徒会メンバーは、実は全員がモンスターだった。

そして、彼らを監視し、人間の生徒達を守る役割を担っているのが風紀委員だ。

そんな生徒会メンバーと風紀委員が、生徒会室に集められた。彼らは、召集した張本人——養護教諭で、風紀委員を監督する笹川仁に注目する。

生徒会室の大きな窓を背にし、深刻な顔をした白衣姿の仁が立っている。ピリピリとした空気に一同は息を呑み、じっと彼が話し始めるのを待った。

「東間紫織と後島光也が日本に来ていることは、皆聞いているな？」

仁が重い口を開く。彼の愛弟子である東間紫織は、現役最強のハンターだ。彼女はモンスターに強い憎しみを抱いている。そして、この学園の教師となった純血の吸血鬼ヴァインセント・ジェン・シルベルの命を狙っていた。

純血の吸血鬼であるヴァインセントは、モンスターの頂点に立つ存在であり、本来なら人間の敵う存在ではない。しかし、今のヴァインセントには弱点となる存在がいる。

寵愛する人間の少女——宮崎音恋。彼女の存在が知られば、利用されかねない。学園の生徒である宮崎音恋のためにも、漆黒鴉学園のためにも、ヴァインセントの弱点を隠し通さなければならぬ。

そう話し合ったのはつい最近のことだ。

そして今、海外でハンター業をしていた東間紫織が日本へ戻って来た。だが、問題はそれだけではない。

「紫織と光也の他にも……厄介な者が日本に来ている。紫織達が追っている獲物だ」

仁は長い茶髪を掻き上げて、はっきりと告げる。

「三百歳になる純血の吸血鬼で、力は、ヴァインセントと同等、あるいは……上だ」

三十年以上前から、ハンター達のターゲットとなっているその吸血鬼は、グールと言う化け物を作り出していた。グールとは、吸血鬼の血を体内に残したまま死んだ人間の成れの果て。本来は作ることを禁じられた存在だが、その吸血鬼は禁忌を犯した。そのため、ハンターに追われ続けているのだ。

吸血鬼は、高位であればあるほど、そして長生きであればあるほど強い。

先日、ヴァインセントが激怒する出来事があったが、彼を止めるのは、モンスターの教師や風紀委員が総出であたっても苦勞した。

百歳に満たないヴァインセントですらこうなのだ。そんなヴァインセント以上の強さを持つ、危険な吸血鬼が日本にやって来たと聞いて、生徒会室がにわかにざわめき出す。

「ど、どうすんだっ……!!」

生徒会会計で狼人間の橙空海が立ち上がり、声を上げた。仁が掌を向けてそれを制止する。

「紫織達は、表向き獲物を追ってきたと言っていたが、ヴァインセントのことも狙っている。少しでもあいつらにつけ入られるような隙を作ったら、喜んでやって来るだろう」

強い眼差しで一同を見て、仁は告げた。

「その吸血鬼は、ヴァインセントの旧友らしい。後島曰く、この近くまで来て消えたそう。もちろん、その吸血鬼が学園に来るという確証はない。だが、万が一のために、も厳戒態勢で学園を守るぞ」

ヴァインセント以上の吸血鬼の存在に不安や恐怖を感じながらも、ここに集められた者達は、この学園を、生徒達を守りたいという強い気持ちを持っている。

「くっそ……これから体育祭なのによ……」

悔しそうに咬く橙を見た仁達は、何も言わずに目を逸らした。

すると、今までずっと黙って俯いていた生徒会庶務で鴉天狗の黒巢漆が、机の上に拳を叩きつけた。突然上がった大きな音に驚いて、一同は黒巢に注目する。

「……ここにヴァインセント先生がいらないんですが……彼はどうするんですかー？」

今の行為が嘘のように、やる気のなさそうな声を伸ばして、黒巢はこの場にはいないヴァインセントについて問う。

「……ヴァインセントには、この件は話さない。せっかく今は音恋ちゃんと距離を置いているのに、彼女に危険が迫っていると知れば、自分が守ると言い出しかねない。紫織達が近くにいる以上、二人は一緒にいない方がいい。言ったところでアイツを説得できるわけもないから。全員、この件をヴァインセントの耳に入れるなよ」

仁は皆を見渡して、きつく釘を刺す。そこで、風紀委員長の笹川竹丸が手を挙げた。

「旧友なら、ヴァインセント先生から日本を出よう説得してもらったら？」

「あほ言うな。力が同等なら、ヴァインセントの言うことなんて聞くわけがない。むしろ、ヴァインセントをこの件に関わらせた方が事態が悪化する」

竹丸の提案を、髪を掻きながら仁が一蹴する。

すると、再び黒巢が手を挙げる。天井にピンと伸ばした左腕をフラフラと揺らして言った。

「宮崎さんはどうするんですかあー？ 学園の秘密を話して関係者にする件が保留中ですよ」

彼女はすでに、ヴァインセントと赤神のカミングアウトによって吸血鬼の存在を知っている。

ならば、音恋を関係者にして、秘密を漏らさないよう監視する名目で、生徒会メンバーがそばにつき、ヴァインセントから遠ざけようという案があった。だが、ある日突然、音恋がヴァインセントを拒絶したために、一旦保留となったまま忘れられていた。

音恋を関係者にすることに反対している橙と竹丸が、黒巢を睨んだ。

「もう赤神先輩が吸血鬼だということも知ってしまったんですし、この際、近くに危険な吸血鬼がいるから夜は出歩くなって話すべきじゃないですかー？ 一番、被害にあっちゃいけない生徒ですよー？」

その言葉に、生徒会室にいる皆の顔色が変わる。確かに、彼女の身に何か起これば、必ずヴァインセントが関わってくるだろう。さらに、彼女の体内には純血の吸血鬼の血が入っているのだ。万が一にも命を落とすような事態になれば、彼女はグールとなってしまふ。

グールを作った吸血鬼は問答無用でハンターのターゲットになる。そんなことになれば、紫織達

にヴィンセントを狩る大義名分ができてしまう。

しばらくして、皆の視線を受けた仁が口を開いた。

「いや……音恋ちゃんに話せば、ヴィンセントが知ってしまうかもしれない。だから、音恋ちゃんにも話さない方がいい。その代わり、今まで以上に俺達で注意をするんだ」

「……そうですね」

黒巢はあっさり引いたふりをしたが、机の下では拳を強く握り締めていた。

三話 冗談好き

昼休みは、中庭のベンチに座ってサクラと風紀委員の草薙彦一先輩に挟まれてランチ。

草薙先輩には、特に変わった様子は見られない。

私がこうして草薙先輩を気にしているのは、二限目の合同練習の後、少し気になることがあったからだ。

保健室から戻った私のもとへ、生徒会長の桃塚星司先輩と、彼の幼馴染で私が保健室に行く原因となった三年のミラクルDJツ子、春風美南先輩が様子を見に来てくれた。その時、廊下に立っていた桃塚先輩に、一年の風紀委員が何かを耳打ちしてきた。その途端、桃塚先輩の顔色が変わったのだ。

いつも優しい笑みを浮かべている桃塚先輩が、凄く深刻そうな表情をしている。

だけど、何かあったのか聞く前にチャイムが鳴ってしまい、桃塚先輩は引きつった笑みを残して春風先輩と教室に戻って行ってしまった。

もしかしたら、突然学園に現れた後島光也と関係があるのだろうか……そんな予測をするも、学園の秘密を知らないことになっている私が、何か事件でもありましたかなんて聞くことはできない。結局何事もなく昼休みとその後の授業を終え、放課後となった。

ちらりと隣のクラスを覗いたけれど、生徒会の黒巢くんも緑橋くんもすでにいなかった。こんなに早く生徒会室に向かったということは、何かよっぽど深刻な事態でも起きたのでしょうか。

「音恋ちゃん！一緒に部活行こう？」

廊下に立つてそんなことを考えていると、後ろから明るく声をかけられた。ふんわりとウェーブのかかった栗色の髪をおさげにした可愛い少女、七瀬紅葉ちゃん。その隣には恋人で、女の子みたいに可憐な顔をした園部暁くんこと、きょくんもいた。二人は私が入部を決めた演劇部の友人だ。

「あ、俺も行く！」

ひょこっと、紅葉ちゃんときょくんの横から、クラスメイトの木下くんが顔を出す。彼も演劇部だ。私は頷いて、三人と一緒に演劇部の部室に行くことにした。

私の知らないところで起きていることが、気になってしょうがない。けれど私は、ゲームとは関係ない人生を生きる決めたのだ。だから、極力気にしないように、思考から切り離そうとした。すると、階段を下りた先に、壁に寄りかかった桃塚先輩が待っていた。

いつも通りの愛らしい笑みを向けられた私は、安堵を覚えてつい笑みを返してしまいそうになる。

生徒会長の彼がここにいるということは、そこまで深刻な事態ではないみたい。

「桃塚先輩も見学に来るんですか？」

「うん、音恋ちゃんの付き添い。昨日は生徒会の仕事があったから来られなかったんだ」

紅葉ちゃんにそう答えると、桃塚先輩は私に笑いかけてきた。

そういえば付き添うって話していたっけ。ひとまず心配は杞憂だったみたいで安心しました。

皆で演劇部の部室である、多目的教室Dに向かう。だけど、私が教室に入った途端、複数の手に腕を掴まれた。

「宮崎ちゃん！　ねえどうなの!？」

「桃会長にお姫様抱っこされた感想は!？」

「ときめいた!？」

「兄と妹という関係以上になりそう!？」

「禁断の展開にいつちゃう!？」

演劇部の女子生徒達から一斉に詰め寄られて、質問攻めにあう。合同練習で頭を打って倒れた時、桃塚先輩にお姫様抱っこされて保健室まで運ばれたからだ。

興奮した様子の彼女達に取り囲まれて、私は気圧されたようにその場で立ち尽くした。クラスメイトのユリさんや森田さんの質問攻めの比ではない。こうしたことに慣れていない私には、対処の仕方がわかりません。

「皆だめだよ？　いきなりそんないっぱい質問されても、答えられないよ」

後ろから、私の肩をぽんと叩くのは桃塚先輩だ。

「質問には僕が答えるよ」

そつと背中を押されて、輪の中から抜け出せた。代わりに質問攻めを受けてくれるらしい。女子生徒達に囲まれてひとつひとつ丁寧な答えていく桃塚先輩に頭を下げると笑みを返された。

私は人集りのできている教室の入り口から離れて、演劇部の部長である江藤菜穂先輩に歩み寄った。

上は体操着で下は長スボンのジャージ姿の江藤先輩は、飛び込んで来いと言わんばかりに両腕を広げて待ち構えている。それを無視して、私は頭を下げて挨拶をした。

「先輩にすすめられた本、借りました」

「……気に入った？」

「まだ全部は読んでいませんが、冒頭から気に入りました。教えて頂きありがとうございます。あの、今日も倉庫で台本を見てもいいでしょうか？　置いてある小道具もゆっくり見たいので」

「いいわよ。ほらそこ、稽古をやらなさい」

江藤先輩は入り口で桃塚先輩を囲んでいる部員を注意すると、てきぱきと指示を出して、私を部室の隣にある倉庫へ案内した。

女子部員に解放された桃塚先輩が、「僕も」と言っついてきたので、三人で倉庫室に入る。

「うわー、いっぱいあるね」

倉庫に初めて入った桃塚先輩は、興味津々に小道具を眺め始める。

「あ、これ、去年の劇で使ったものだよね？　わあ、すごいねえ、今までの小道具をきちんと残してあるんだ。衣装まであるね」

倉庫内は足の踏み場に困るくらい物が置いてある。軽い足取りで部屋の奥に進んでいく桃塚先輩は、私の目的の本棚とは反対側にある衣装置き場に向かう。

その中からドレスを一着手に取ると、キラキラした目で私を見てきた。

「なんですか？」

「着てほしいなあ……」

「ふうん、桃塚先輩ってそんな嗜好しこうの持ち主だったのですね、ドン引きです」

「えっ、絶対に似合うと思うよ！　それに僕は普通の嗜好……って、ちょっと待って！　そんな嗜好って、どんな嗜好のこと!？」

「冗談ですよ」

「だから冗談を言う時は笑うとかしてっば！　よくないよ、よくないと僕は思う！」

あたふたする桃塚先輩を横目に、私は本棚の前にクッションを置いて座る。その様子はいつもと変わらない桃塚先輩で、私はまた安心した。

黙って私と桃塚先輩のやり取りを見ていた江藤先輩は、少し驚いたような様子で口を開く。

「存分にかかわれてるのね、桃塚君……」

「……音恋ちゃんは、冗談が好きだからね」

「なるほど。可愛がられているのは、桃塚君の方だったのね……それはそれで美味おいしい！」

「そ、そう……」

可愛いものの好きで、たまにセクハラ行為まがいのハイテンションを見せる江藤先輩の言葉に、桃塚先輩は苦笑する。

主観と客観が違うことは、よくあることですな。

「ああ、宮崎さん。明日までに顧問から入部届を貰もらって提出してちょうだい。演劇部への入部は決めたのでしょ？」

「はい。明日までですね、わかりました」

倉庫にある机について、台本作りに取りかかる江藤先輩に頷く。

ふと視線を感じて桃塚先輩を見ると、ニコニコと楽しそうな笑みを浮かべている。

「菜穂ちゃん菜穂ちゃん、音恋ちゃんはこの前やったお姫様役をするの？」

「あの台本は文化祭用じゃないわ、文化祭用は今書いている」

桃塚先輩が弾んだ声で問うと、江藤先輩は手元から顔を上げずにそう伝える。

「私、舞台には上がりませんよ」

私はすかさず主張した。桃塚先輩は納得いかないように顔をしかめたけれど、椅子に座っている江藤先輩は腕を組んでフツと勝ち誇った笑みを向けてきた。

「貴女好みの物語でも、断れるかしら!？」

「断れます」

「な、なんですって!？」

たとえ好みの物語であろうとも、私に役を演じたいという気持ちはない。

断言すると、江藤先輩は衝撃を受けたように仰け反った。私が断らないと思い込んでいたようです。

「だめよ！ この作品は花形ヒロインがお互いに競い合って切磋琢磨した末に、本番で歴史に残る最高の劇になるのよっ!!」

本人を無視して物凄いシナリオを立てている。さすがですね。

「うちの部は、劇のたびに全員でオーディションをやるのよ！ 貴女も入部するなら、うちのルールに従ってちょうだい！」

「郷に入りては郷に従えですね。わかりました。ですが、オーディションで受かるとは限りません」

「本気で挑みなさい！」

「観客に声を届けられないという点が大きく響くかと」

「大声はこう出すのよー!!」

「菜穂ちゃん、落ち着いてっ」

テンションが上がり出した江藤先輩を、桃塚先輩が慌てて止める。

そういうえば、と背後の壁の向こうに耳をすます。昨日は聞こえた隣の部屋の稽古の声が、今日は聞こえてこない。

「部長、隣が静かですよ」

「っ！ 本当ね……見てくるわ」

目をキッと鋭くした江藤先輩は、すぐに倉庫室を飛び出していった。

私と桃塚先輩は揃ってその背中を見送る。持っていたドレスを戻した桃塚先輩が、机に歩み寄り、書きかけの台本に手を伸ばした。私はすかさず「だめですよ」と注意する。

「部外者には、公演まで内容を知らせないルールだそうです」

「部外者って……冷たい言い方だなあ」

「入部する気はないのですから、桃塚先輩は部外者です」

「そうだけど……」

部外者呼ばわりが気に入らなかったのか、桃塚先輩は膨れっ面をして私の隣に腰を下ろす。本棚と机の間には、ちょうど人が座れるスペースがあった。二人で座るとお互いの腕が触れるくらい狭いけれど。

「恋ちゃんは気にならないの？ 恋ちゃんが演じることを想定して書かれてる物語だよ」

「完成した台本を読むのは好きですが、私は役者志望ではありませんので」

「そっかあ」

私は手元の台本に目を通してながら答える。立てた膝の上に頬をつけた桃塚先輩は、じつとこちらを見ているようだったけれど、何かに気付いて顔を上げた。

「見て見て、僕と恋ちゃんの生まれた年の台本まであるよ」

桃塚先輩の左腕が私の鼻先を通って、本棚に伸ばされた。その瞬間、香水とは違った色んな香り

がふわりと鼻に届く。

「香水ですか？」

「あ、ううん、制汗スプレー。クラスの子達が練習のあとにつけててね、皆でつけあいっこしてたら、色んな香りが混ざっちゃったんだ」

無邪気に笑って答える桃塚先輩。女子に囲まれてキャツキャツと楽しんでいる桃塚先輩が簡単に想像できた。女子生徒に人気があって皆と仲良く接することができる桃塚先輩らしい。

「……星くん、色んな女の人の匂いにする……ひどい」

「えっ!? そういうつもりじゃないんだ! ただ遊んで……」

「私という存在がいながら、色んな女性と遊んでいるなんて……!」

口を押さえ俯いて泣いたフリをする。

「ち、違うよ! というか、待って恋ちゃん! このネタでの冗談は、僕の精神的ダメージが大きいかからやめて!」

すると、桃塚先輩は大慌てで、必死にストップをかけてきた。

偽の恋人だからこそできるネタなのに。

以前、母が唐突に見合いをしると言ってきたことがあった。私はたまたま一緒にいた桃塚先輩に恋人のフリをしてくれるよう頼み、両親に見合いを断つてもらったのだ。しかし、思いの外両親が桃塚先輩を気に入ってしまったため、今もまだ二人に本当のことは伝えられていない。

「桃塚先輩が過去に付き合ってきた恋人は、嫉妬したりしなかったのですか? 他の女子生徒にち

やほやされていれば、やっぱり焼き餅妬きますよね?」

さっと泣き真似をやめて、思ったことを訊いてみた。

ゲームの中では、付き合っても結局正体が明かせないまま別れた」と話していたけれど、皆に優しい桃塚先輩の接し方にも原因があったのではないだろうか。

「ううん! 付き合ってる間は、ちゃんと気を付けてたよ? ほら嫉妬ってモヤってしちゃうでしょ? そんな思いさせたくないから」

「そうでしたか」

失礼なこと言ってしまったようです。

「桃塚先輩って、意図的に相手を嫉妬させることができそうですね」

「……効果はないみたいだけどね」

「え?」

「なんでもないよ!」

桃塚先輩はブンブンと首を振る。何かボソツと言った気がするけれど、文字を目で追っていたから頭に入ってこなかった。

壁の向こうで江藤先輩らしき声がする。スパルタ指導が始まったようです。

「……やっぱり恋ちゃんって演技上手いよね」

それが聞こえたからか、桃塚先輩が演技の話始めた。さっきの冗談のことらしい。

「そうですか? 普段あまり感情を表に出さない分、そう見えるだけでは?」

「あー、それもあるかもしれないね。さつきも悲しい感じがすごい出た。きっと感情を上手く作れてるんじゃないのかな？」

感情を上手く作れてる、か。

「恋ちゃん、冗談言うの好きでしょ？ 演技も同じくらい好きになれるんじゃないかな？」

首を傾けて笑いかけてきた桃塚先輩は、「恋ちゃんって、いつも楽しんで冗談言うもんね」とつけ加えた。

冗談を言う時、毎回クスリとも笑ってないのに、楽しんで冗談を言っていると伝わっていたようです。

今までもそう見られていたのかと思うと、なんだか擦^{くすく}つたくて、私は持っていた台本で顔半分を隠した。

「……楽しいですよ。ツツコミは疲れますからボケの方が楽しいですけど」

「僕も、恋ちゃんとのやり取りは楽しくて好き」

体育座りした膝の上に頬をつけて、私を見上げるように笑いかけてくる桃塚先輩。

その無邪気で可愛らしい笑顔を見た私は、台本を上げて顔全部を隠した。

「私も好きです」

微笑みそうになる顔を隠して小さく答える。なんだかとても恥ずかしい。

「え、あ……あ、ありがと……？」

微妙な反応が返ってきたから、台本から目だけを出して見てみれば、桃塚先輩はそっぽを向いて

後頭部のふわふわした髪を掻いていた。

ふと、倉庫室の中に沈黙^{おとし}が訪れる。

壁の向こうでは、相変わらず江藤先輩の熱血指導が続いているのか、背中から微かな振動^{かす}が伝わってきた。

しばらくして私の方に顔を戻した桃塚先輩は、照れたように可愛らしい笑みを零^{こぼ}しました。

四話 直球

翌日の昼休み。私はランチの前に江藤先輩に言われた入部届を出しにいきこうと立ち上がる。廊下で待っていたサクラに、職員室に寄ってから行くことを告げたら、ガシリと腕を掴まれた。

「あ、あたしも行く！」

「サクラまで来たら、遅れてくること草薙先輩に伝わらないよ」

「うっ……！ じゃあ、あたしが職員室に行くから、ネレンが先に草薙先輩の所に行つて！」

「サクラは何をしに職員室に行くの？」

「うっ……！」

どうやらサクラは、草薙先輩と二人きりになることを回避したいようです。

過去のトラウマから男性恐怖症になってしまったサクラは、異性に対してなかなか恋愛感情を抱くことができないでいた。そんなサクラが、最近、風紀委員の天然たらし王子で、ゲームの攻略対

象の一人でもある草薙先輩のことを意識しているようなのだ。

私は、目の前で狼狽^{うろた}えているサクラを数秒見つめてから、おもむろに彼女の右手を握る。

「サクラ、草薙先輩のことが好き？」

「っ！！！」

直球で問いかけるとサクラは、肩を震わせて顔を真っ赤に染めた。

「ち、ちちち違うもんっ！ 草薙先輩はネレンのものだもんっ！」

「それこそ違うよ」

その発言は誤解を招きます。ひとまず廊下に立っていた私達は、階段の踊り場の隅まで移動した。

「サクラ。私は草薙先輩のこと、恋愛対象として見ていないよ」

「でも、草薙先輩はネレンが好きだもん！」

「先輩がそう言ったの？」

「言った！」

サクラが真剣な顔をして断言してくる。数秒停止して考えた。サクラの思い込みだけではなく、草薙先輩はサクラの前で「音恋が好き」という言葉を言ったのかもしれない。

「それ、きつと恋愛的な意味の好きじゃないと思うよ」

サクラは恋愛の「好き」として受け取ったようだけれど、天然たらしの先輩のことだ。友だちとか後輩とか、広い意味での好きだと思ふ。

けれどサクラは、そんなはずないというように首を振った。

「そんなことないもん！ 先輩はネレンのこと好きになるよ！」

「……サクラはどうなの？ 草薙先輩のこと、好き？」

私のことを絶対に好きになるという根拠がよくわからない。けれど、私も思い込みでサクラの気持ちを決め付けないように、サクラの口から直接気持ちを聞くことにした。さらに頬を赤くしたサクラは、唇をムグムグ動かすと俯^{うつむ}く。

「よ、よく、わからないんだ……なんだか、すっごく……ドキドキして……苦しいの。気が付くと先輩のこと、考えちゃって……でも近くにしていると意識しちゃって……目を合わせるのも恥ずかしいの。そばにいただけで、なんだか心臓が早く動いちゃって……これが……好き、って……こと、なの？」

サクラは胸を押さえながら小さく答えた。まさに恋する乙女全開のサクラの様子に、私の胸がキュンとする。

「それが、好きだよ」

恋をしたこともない私が言えることではないけれど、ここでは断言しておく。サクラは、耳まで真っ赤になった。

「でもでもっ！ 先輩はネレンがあ！」

「せっかく芽生えた恋心を、隠しちゃうの？ 本当にそれでいいの？ 恋愛したかったんだよね、サクラ」

私は、ぶんぶんと左右に首を振るサクラの両手をキュッと握って、しっかりと目を合わせる。

男性恐怖症のサクラが、恋愛感情を抱いたのだ。私に遠慮してその感情を掻き消してほしくない。ゲームのヒロインは、攻略対象に恋をして過去のトラウマを消し去ることができた。

だから、サクラにも素敵な恋をして幸せになっほしい。

「サクラが距離をとると、草薙先輩は傷付いちゃうよ？ それでもいいの？」

「だ、だめっ！」

「なら、逃げちゃだめだよ。まずはさ、余計なことは考えないで、草薙先輩と楽しく喋ろうよ。そこから始めよう、ね？」

ゆっくりと言いかせるように提案した。

でも、と口ごもるサクラに、私はもう一押ししてみる。

「きつとこの恋が、トラウマを消し去ってくれるから……だから、サクラらしく笑って」
きつと、きつと……素敵な恋になるはずだから。

私が幾度も見てきたゲームのシナリオ通りじゃなくても、サクラはきつと素敵な恋愛をする。そうならなくちゃいけないと思う。

「ゆっくりでいいから、その気持ちと草薙先輩に向き合うべきだと思う」

「……そうかな。ネレンは？ ネレンはいいの？」

「私はいいの。サクラ、応援してるから……頑張って」

まだ迷いを見せるサクラに、優しく微笑む。するとサクラは、ひとつ深呼吸をして「うん！」と強く頷いた。

「頑張ってみる！」

そう言って笑ったサクラの手を、私はもう一度キュッと握り締める。

サクラは栗色のポニーテールを揺らしながら、階段を駆けるように下りていった。

それを見送った後、私は中庭が見える廊下に急いで移動する。

二階の廊下の窓を小さく開けてそっと覗いてみれば、ベンチに座る草薙先輩を見付けた。

しばらくして、校舎からサクラが小走りで草薙先輩に近寄っていく。肩が上がって緊張しているのがよくわかる。私は頑張れ、と心の中で念じた。

草薙先輩はそんなサクラに、笑顔で隣に座るようにベンチを叩く。

サクラはぎこちなくベンチに歩み寄ると、草薙先輩の隣にほんの少し距離を開けて座った。

それが男性恐怖症のサクラにとって、異性に近づく限界の距離だ。

私が遅れることを話したようで、購買で買ったお弁当を二人して食べ始める。でも、サクラの表情は強張ったままだ。頑張れ、とまた念じた。

すると、サクラが思い切って草薙先輩に話しかけた。一生懸命話をするサクラに、草薙先輩はコクコクと相槌を打ちながら笑顔を見せる。次第に緊張が解けてきたのか、サクラの笑みも自然になつてきた。

恋する乙女の笑みだ。とても眩しい。

それを見て、私は心からの安堵を覚える。そして、嬉しくなった。

この世界は、創造主の神様——シヴァ様が私のために作った世界だけれど、ちゃんとサクラの物

語がある。前世の私が憧れていた、姫宮桜子がちゃんといえることに安心した。

ああ——やっぱり、サクラがヒロインだ。

自然と口元が緩む。ふわふわと浮いてしまうような気分。やはり私は、スポットライトの中に立つのではなく、こうしてスポットライトの中を見守る側の方が性に合っている。

とはいえ、私は私の人生を生きなくてはいけないから、いつまでもサクラを傍観してはいられない。

音を立てないようにそつと窓を閉めて、私は職員室に向かった。

いつかは私も恋をするのでしょうか。

その時、私もあんな風に相手に笑いかけることができるのでしょうか。

人を好きになる気持ちって、私が想像しているのと同じでしょうか。

いつか聞いてみよう。恋をしている紅葉ちゃんや、サクラに。

そんなことを考えながら歩いていると、廊下の角で「恋をしているかもしれない人」と出会ってしまった。

腕を組んで壁に凭れている彼は、どうやら私を待ち構えていたようです。

鮮やかな深紅の髪を持ち主で、麗しい顔立ちながら私を見下ろす眼差しには鋭さがある。

生徒会副会長の赤神先輩だ。

先日、ヴィンス先生の怒りに触れた赤神先輩は、この数日学園を休んでいた。吸血鬼の高い治癒能力をもってしても登校できないくらいの怪我を負ったのだと、黒巢くんから聞いていた。

よく見れば、きつちりボタンがかけられたワイシャツの襟元から絆創膏が覗いている。私に真っ直ぐ向き直った彼の右頬にも、絆創膏が貼られていた。

「見舞いどころか、メールの一通も寄こさないとはどういうことだ？ 音恋」

怒ったような声で、赤神先輩が声をかけてくる。

私かとぼける前に、彼は「事情は知っているだろう？」と言って眉間にシワを寄せた。

「メールを送るという発想はありませんでした」

御愁傷様とメールを送っておくべきでしたか。無表情で首を傾げると、赤神先輩の眉毛がピクリと震えた。

「みーやーざーきーさーん」

その時、背後からやる気のなさそうな口調で名前を呼ばれた。振り返るとズボンのポケットに両手を入れた黒巢くんがいる。私を助けに来てくれたようです。

鴉天狗の黒巢くんは、シヴァ様に私のサポートを頼まれていたのだそう。つまり、私以外で唯一、ここがゲームの世界と知っている存在。これまで、私を神様の望むハッピーエンドに導こうとして、色んなことをしてきたのだけれど、今は神様に言われてひとまず傍観してくれているようです。

もっとも、ヴィンス先生のパシリもしているので、彼に命令されたのかもしれませんが。

「そのそマイペースにやっていると、昼休み終わっちゃいますよー。残り時間あと四十分ですからねー」

黒巢くんは私の背中を押して、赤神先輩から逃がそうとしてくれた。

しかし、赤神先輩はそれを許さない。私と黒巢くんの間に腕を割り込ませたかと思うと、黒巢くんの肩を掴み――ダークブラウンの瞳の瞳孔を尖らせた。

「先に職員室に行っている」

「……はい」

そう返事をした黒巢くんはクルリと向きを変え、一人で職員室へ歩いて行ってしまう。

赤神先輩が、吸血鬼の能力である暗示を黒巢くんにかけた。

黒巢くんも、まさか暗示をかけられるとは思っていなかったのでしょうか。完全に油断して赤神先輩の目を見てしまった。ゲームでは、暗示をかけられた人は、それを自分の意思だと思い込む場合が多いとされていた。けれど、黒巢くんは暗示をかけられた自覚がある。すれ違い様に見えた彼の顔は物凄く不機嫌だった。

「……私にそれは、使えませんよ」

黒巢くんの不機嫌オーラを纏う背中を見送ったあと、私は赤神先輩を見上げる。

「……………何故」

赤神先輩は問う。暗示が効かない理由ではない。

「何故、彼を信用する？ アンタが思うようないい先生じゃない」

何故ヴィンス先生を信用して、彼の血を摂取し続けるのか。

「俺が何をされたのか、想像がつくだろう？ 何故アンタは警戒しないんだ！」

「……赤神先輩は自業自得でしょう？」

吸血行為とマーキングが、ヴィンス先生の逆鱗に触れることくらいわかっていたでしょう。

ヴィンス先生がどんなに怖い人なのかなんて、会う前から知っています。私の知るゲームの中の彼は、ダークなシナリオの悪役だったのですから。それに、今さら警戒心を強めても、仕方のないこと。

「……アンタは何もわかっていない、全然わかっていない！」

赤神先輩は、苛立った様子でため息を零す。

「身体の弱いアンタにとって、吸血鬼の血は万能薬かもしれないが、もう口にするな。……アンタのためだ」

私のためという赤神先輩の言葉に、私は眉を寄せてしまう。

何故なら、私がこうしてまたヴィンス先生の血を摂取することになったのは、他の誰でもない赤神先輩が原因だから。赤神先輩が私の血を飲んだりしなければ、再び血を摂取しようとは思わなかっただろう。

吸血鬼の血を摂取した人間に吸血鬼の暗示は効かず、また、その血は不味くなるらしい。つまり、ヴィンス先生の血が私の体内にある限り、他の吸血鬼からの暗示と吸血行為を防ぐことができるのだ。

そもその原因から、そんなことを言われても「暗示をかけたからやめろ」と言われているようにしか思えない。

それがそのまま伝わったのか、赤神先輩が顔をしかめた。

「もう許可なしに血を舐めたりしない。それにアンタに暗示をかけたたりしない」

約束をしているつもりなのか。

私は赤神先輩から視線を外して、誰もいない廊下を見つめながら考える。

ゲームでは、赤神先輩は強引な俺様キャラとして登場するけれど、ヒロインを真っ直ぐに想う人だった。ヒロインに対して、暗示でどうこうすることは一度もなかったように思う。

赤神先輩が、脇役の私にこんな約束をしてくるのは、きっと私の取った不用意な行動のせいだろう。

どうやら私は不用意な言動によって、彼との恋愛フラグを立ててしまったようなのだ。

笹川先生は無視が一番だとアドバイスしてくれたけれど、ヴィンス先生と同じく相手の気持ちに応えるつもりがないのなら、きっぱりと断った方がいいのだと思う。

私は赤神先輩に視線を戻して、先程のサクラ同様に直球で訊いてみることにした。

「赤神先輩は、私のことが好きなんですか？」

訊いた途端、赤神先輩は目を見開く。そのまま、まるで容姿端麗な青年の彫像みたいに固まってしまった。

何を考えているのでしょうか。躊躇している？ はたまた混乱？ もしかして自覚していなかったのでしょうか。それでも私は、自ら終止符を打つための言葉を続ける。

「私に恋愛感情を抱いていないなら、関わることをやめてください」

あえてそう言う。

恋愛感情を抱いていないなら、関わることを拒否する。

もし、恋愛感情を抱いている」と言われたら、その時はすかさず「気持ちには応えられない」と伝える。

どちらにせよ、拒否。

神様に言われるまでもなく、私はこの世界で私の人生を生きる。平穩に長生きしたい私は、モンスターである彼らと恋愛するつもりはない。だから、私ではない他の人との恋を探してほしいのだ。彼らが幸せになるように。

私が、返答を促すように一歩踏み出すと、赤神先輩はようやくその口を開いた。

「――俺は……」

真っ直ぐ私に向けられるダークブラウンの瞳が、すでに答えているように感じる。

けれど、私にその気持ち伝えられることはなかった。

彼の横に、いつの間にかヴィンス先生が立っていたからだ。その後ろには黒巢くんが立っている。瞳をスッと細めた赤神先輩が、ヴィンス先生と対峙する。

腕を組んだヴィンス先生は、冷ややかな眼差しで赤神先輩を見据えた。

急に肌寒さを感じて、私は身体を縮こませる。

よりにもよって、何故ヴィンス先生を連れてきたのですか、黒巢くん。

「だーから、宮崎さんの、のろのろペースだと、昼ご飯食い損ねて今日も保健室に行くはめになり

ますよー？」

黒巢くんが、私の腕を掴んで歩き出した。

その間も、赤神先輩とヴィンス先生は私を見ることなく、睨み合うように対峙している。掴まれた左手を左右に振ると、パツと離れた。気が付けば、目の前には職員室のドア。後ろを振り返ったら、ヴィンス先生と赤神先輩の姿は廊下から消えていた。

黒巢くんは目を戻すと、さっさと行けと顎で職員室をさされる。

ムスツと唇を尖らせている黒巢くんは、私は大人しく従った。職員室に入ると、真っ直ぐ演劇部の顧問である三吉先生の所まで行き、入部届を貰う。

その場で部活名と名前を書いて提出。これで入部は完了。

一礼して職員室を出ると、黒巢くんは入り口で待っていた。

私を横目で見ると人差し指を上に向け、無言で歩き出す。その後ろをついて行くと、黒巢くんは屋上への階段を上がっていった。

沈黙したまま屋上へ上がり、黒巢くんが開けた扉から外に出る。

先週末時には、破損したコンクリートを隠すブルーシートが敷いてあり、屋上は立ち入り禁止になっていたが、今はすっかりもとに戻っていた。

しかし、屋上が直ったという知らせは生徒に届いていないようで、そこには誰もいなかった。

屋上の真ん中まで来た黒巢くんは、左手の指先を空に向けてクルッと半回転させる。

今の仕草は、人間よりずっと耳のいい人外の者達への盗聴防止策で風を起こしたのでしょうか。

私が見上げて、雲が多い空には特に変化は見当たらなかった。

「シヴァ様から東間紫織の登場は冬って聞いてたけど、違うのか？」

不機嫌な顔のまま振り返った黒巢くんが、いきなりそう聞いてくる。

「ううん、ゲームでは二期の冬だった。ただ、ゲームは主人公視点で進むから、主人公が知らないだけで、後島さんは笹川先生を訪ねてきたのかもしれないけど」

「……アンタ、この時期の東間紫織の動き知ってる？」

「……知らない」

彼の用件は、昨日のイレギュラーに関するところらしい。私のサポートをするために、黒巢くんはシヴァ様から大まかなゲームのシナリオを聞かされている。

けれど、シヴァ様はいい加減にゲームのシナリオを把握していたのか、あまり詳しくは知らされていないようです。

私は首を横に振って、東間紫織の情報はないことを伝える。

「もしかして、ハンターの仕事に黒巢くん達も駆り出されたの？」

「……まあそんなところ」

黒巢くんは曖昧に答えて、そっぽを向いてしまった。

昨日の桃塚先輩の様子から、何か事件が起きたのかもしれないと思ってはいたけれど、風紀委員だけでなく生徒会まで駆り出されるような非常事態なのだろうか。

私は不安を覚えて、数歩離れている黒巢くんを見上げた。すると、こちらに視線を戻した黒巢くんが一瞬目を見開いたあと、戸惑うように目を泳がした。

「えーと……………アンタ、さつき赤神先輩をフろうとしただろ？」

突然、話題を変えられる。どうやら、非常事態については教えてくれないみたい。

ならこっちも答える義理はない。

私はそっぽを向いた。

「……………おい」と黒巢くんは怒ったように声をかける。

そのまま無反応を貫くと、三十秒ほど沈黙が続いたあと、黒巢くんがしぶしぶ口を開いた。

「……………後島光也が追ってきた純血の吸血鬼が日本にいる。用心して、学園の周りを警戒中」

「ゲームでは、後島さんは夏休みの間に、海外でその吸血鬼に脚を折られちゃう予定だから、そのうち二人とも海外に発つと思う」

「俺はそんなこと聞いてないんだけど？」

情報が欲しければ交換と最初に言ったのは黒巢くんだから、仕方なく彼は事情を話したのだろう。私も役に立つであろう情報を与えたのに、黒巢くんはしかめっ面をする。

「……………アンタが余計なことしなければ、その吸血鬼は勝手に日本からいなくなるわけか……………はあ」先ほどの答えを聞き出すのを諦めて、黒巢くんは疲れたように皮肉を吐くと、その場にゴロンと寝転がった。そうしてそのまま、膝を立て脚を組む。

「昨日の放課後からずっと近辺のパトロールなんてさせられて、へとへとだっつーの。なのに俺は

アンタの面倒まで見なくちゃなくて……………ああ、嫌んなる」

「お疲れ様」

屋上のだ真ん中で寝転がって背伸びをする黒巢くん。本当にお疲れみたいだ。

私も、とりあえずその場に腰を下ろした。

湿った風が、私の髪を揺らして頬を撫でる。屋上には、寝転んでいる黒巢くんと私だけ。盗聴防止の風の効果か、昼休みの喧騒も聞こえてこない。

私は少し灰色に見える雲が広がる水色の空を、ぼんやり見つめた。

「ねえ、君がこうして私と秘密を共有していることも、そのうち何かに影響してくるのかな？」

なんとなく湧いてきた疑問をぶつけてみる。

だけど、風の音しかないこの場の静寂に、答えを見付けた。

「君とこうしていても、周りに悪影響を及ぼしはしないみたいだね」

「……………たぶんな」

この世界の事情を知っている黒巢くんが、私に恋愛感情を抱くという可能性は少ないだろう。一緒にいても、いつの間にか波紋のように広がる悪影響を心配する必要もない。

それを確認して、少し安心した。

「……………宮崎」

呼ばれたので顔を向ける。けれど、組んだ脚のせいで私の位置からは、彼の顔は見えない。

「アンタの情報通りなら心配いらないと思うけど、念のため用心しとけ。つうか夜は出歩くな。い

や、外出する時は俺に言つて。色々怒られるの、俺なんだからな」

後島さんが持ち込んできた問題と、私の行動を結びつけられて首を傾げる。

「はあ……アンタさあ、自分の置かれている立場をもう少し理解しろよな。この無頓着め。まったく、焦ったこっちの身にもなれよ……」

大きなため息をつくとき、ごそごとポケットから携帯電話を取り出す。

つまりアドレスの交換。

これから私は出掛ける前に、黒巢くんにメールを送信しなくてはいけないのですか。保護者みたい。

腰を上げて黒巢くんの真横に移動すると、私もポケットから携帯電話を取り出す。けれど、そのあと、どうすればいいのでしょうか。

すると寝転がったままの黒巢くんが、ひょいっと私の携帯電話を手にとった。

器用に両手で二つの携帯電話をいじっていく。私は感心しながら、そんな黒巢くんを見下ろした。風で黒巢くんのボリュームある黒髪が揺れる。

「……見んよ」

無表情で携帯電話を操作していた黒巢くんは、私の視線が鬱陶しかったのか、しかめっ面をする。なら仕方ない。私は黒巢くんの隣に寝転がった。

「なんでそうなるんだよ！」

隣で黒巢くんが、焦ったように声を上げる。

「登録の仕方を覚えようかと」

「それすらもわかんねーのかよ、どんだけ機械音痴なんだ」

ぶつくさ文句を言いながら、黒巢くんは私の携帯電話に「黒巢」と自分の電話番号を登録し、自分の携帯電話には「宮崎」と私の電話番号を登録した。

「メールアドレスは交換しないの？ 電話よりメールの方がいいんじゃないかな？」

「非常事態の時は電話がいいだろ」

「じゃあ外出する時はメールして、非常事態の時は電話する」

「そうだな。電話がかかってこないことを祈る」

「たぶん、私が非常事態に陥ることなんてないと思う。……ヴィンス先生に拉致とかされなければ」

「冗談でも嫌だな、それ」

黒巢くんは面倒くさそうに、私の携帯電話に自分のアドレスを入力していく。そして、私の携帯から調べたアドレスを自分の携帯に入力し終わると、無造作に「ん」と私の携帯を手渡してきた。

携帯を受け取った私は、横になったまま水色の空を見つめる。

こうして屋上に寝転がり空を見上げていると、流星群を見た日思い出す。

満天の星空に、数えきれないほどの流星が現れては消えていった。その息を呑むような美しさと、誰かがそばにいる安堵感から号泣してしまった日。

何気なく右隣にいる黒巢くんの方を向いたら、彼はスッと顔を背けてしまう。



「……そうだ、留守電の聞き方、姫宮から聞いた？」

「あ、聞いてない」

「ついでに教えてやるから、もう一回、携帯貸して」

黒巢くんはそっぽを向いたまま、左手を出す。今日の彼は機嫌がいいみたいで親切だ。せっかくなので、私はその手にもう一度携帯電話を載せた。

しかしそこで、私のお腹が空腹を訴えるようにぐーっと鳴った。

それをぼつちり聞いてしまった黒巢くんは、一拍のちにプツと噴き出す。

右側を向くと、可笑し^{おか}そうに笑う黒巢くんの横顔がありました。

私のお腹を氣遣ってくれたのか、黒巢くんは簡潔に留守電の聞き方を教えてくれる。その合間に、私は姿を消した赤神先輩とウィンス先生について訊いてみる。

「ところで、あのあと二人はどこに行ったの？」

「さあ？ たぶん穩便に話し合ってると思うけど。今は赤神先輩も大怪我して寝込んでる場合じゃないからな。夜はパトロールするし、警戒する相手はグールを作るような吸血鬼だから、万が一の際には戦力も必要だし」

「後島さん達と協力してるの？」

「んなわけないじゃん。モンスター嫌いのハンターだぜ？ ハンターのターゲットになるような危険なモンスターが学園の近くで姿を消したから、念のため警戒してるんだ」

最強のハンターが追うほどのモンスターだ。これぐらい警戒するのが当然なのでしょう。

「ヴィンス先生も協力しているの？」

「いや。今回は、あの人には話さないことになってる」

「同じ純血の吸血鬼だから？」

「そんなところ。ほら、早く飯食に行かないと、また鳴るぜ？」

ひょいっと立ち上がった黒巢くんは、私を見下ろしてニヤリと笑う。

その笑みは、彼がよくする、人をおちよくするような意地悪な笑み。以前、ユリさんに見せてもらった写真の、あの柔らかい微笑は、いったいどんな時に浮かべたものだったのでしょうか。

訊こうかと思ったけれど、私はそろそろ限界となった空腹を優先することにしました。

立ち上がると私の携帯電話がメールの着信を告げる。

見ると中等部の後輩で、実はゲームの攻略対象でもあった双子さんからだった。二人して同じ内容のメールを送ってきている。

家庭科でマフィンを作ったから、放課後サクラと私に食べてほしいそうだ。

部活があるから早めに来てほしいと返信する。もちろん、二人に一斉送信しないといけません。

「俺は食堂行くから……階段から落ちるなよ？」

黒巢くんは最後にそう言って釘を刺すと、背中に翼を広げて、あつという間に屋上から消えた。落ちません。

一人になった私は校舎へ続く扉を開いて、中庭で待っているサクラ達のもとへ向かった。

五話 急展開

漆黒鴉学園の校舎裏。白い薔薇の庭園の外れ。

黒巢の言う通り、吸血鬼二人は一昨日に比べれば、かなり穏便に向き合っていた。

「懲^こりない子ですね。学習能力というものが無いのですか？ 赤神君」

「口^くすらきいてもらえない貴方こそ、ご自分の立場を認識すべきでは？ ヴィンセント先生」

しかし容姿端麗^{ようしたんれい}な二人の纏^{まと}う空気は、あまりに冷たすぎる。

「あの、二人とも、落ち着いてください」

六月にしてはひんやりと冷気を感じる校舎裏には、争いとして駆けつけた桃塚もいた。

「落ち着いていますか？」

「落ち着いてるが？」

桃塚の言葉は、二人から一蹴^{いっしゅう}される。

モンスターの中でも上位に位置する吸血鬼同士の争いなど、桃塚の手には負えない。

視線をずらせば、ブルーシートで覆われた無残に破壊されたフェンスと、立ち入り禁止の看板が目に入る。フェンスの向こうにある公園もひどい状態で、現在も立ち入り禁止になっていた。

一昨日の名残^{なごり}を思えば、今回は暴^{あは}れていない分、確かに落ち着いていると言えなくもない。だが、全然穏やかではないと桃塚は顔を引きつらせた。

ひしひしと肌に感じる吸血鬼の妖気が痛い。
純血の吸血鬼の放つ妖気は、モンスター級の血を継ぐ桃塚にとっても毒のようなものだ。
それを正面からまともに受けている赤神はかなり辛いはずなのに、平然と腕を組みヴィンセントに對抗している。

その反抗的な態度に、桃塚は内心首を傾げる。

今まで猫被りをして、他人との衝突を避けてきた赤神らしくない。

何より、ヴィンセントが寵愛する音恋の血を口にすること自体、彼らしくないことだった。

友人のいつにない態度に、何故か桃塚の胸がざわつく。よくわからない感覚に胸を押さえたら、後ろで物音がした。

振り返ると、三メートルほど上の木の枝に、黒い羽根を撒き散らした黒巢が立っている。

「まーだ、やってるんですかー？」

「ナナ君！ だめだよ、昼間に空を飛んだりしたら！」

「見られるようなへまはしてませんよー」

桃塚が焦って注意しても、黒巢はどこ吹く風だ。

そんな黒巢に、赤神が非難するような視線を向けてくる。

「なんですかー？ 赤神先輩が悪いんですよ、俺に暗示をかけたりするから」

黒巢は、さらっと赤神から暗示をかけられたことを告げ口する。

「暗示!? 淳、ナナ君に暗示かけたの？ よくないよ、それ！ 絶対によくない!!」

仲間に暗示をかけたことに桃塚が非難の声を上げれば、赤神はうんざりしたように肩を竦めた。

「音恋にヴィンセント先生がいかに危険か話していたのに、黒巢が邪魔をしてきたからだ」

「危険なのは、貴方の方でしょう」

静かな怒りを纏うヴィンセントは、青い瞳の瞳孔を鋭く尖らせた。途端に赤神の身体に妖気が重くのし掛かる。

膝をついてしまいそうな圧倒的な妖気。だが、赤神は踏み留まった。

これは、まだ序の口だ。一昨日向けられた妖気に比べれば、羽のように軽い。

「いいえ、貴方ですよ」

赤神は渾身の力を込めて、ギッとヴィンセントを睨み上げる。

ヴィンセントが音恋のそばにいと、彼女の身が危険に晒されるのだ。

ヴィンセントの命を狙っているハンターが学園に来た。彼女らは、目的のためなら手段を選ばないという。もし、ヴィンセントの弱点となる音恋のことを知られば、きつと利用される。

下手をすれば、ヴィンセントを狩るための罠にされかねない。そんな事態にならないように、生徒会も風紀委員も警戒を強めているのだ。

「吸血鬼は人間食べるようなもんですし、両方危険ってことでいいんじゃないですかー」

そんな中、木の上にいる黒巢が緊迫した空気をぶち壊す発言をする。まるで、赤神とヴィンセントの苛立ちを煽っているようだ。

ギョッとした桃塚が、「黙っててよ!」と口パクで伝えるが、黒巢は知らん顔。

「俺お腹減りましたーんで、食堂行ってますね」

言うや否や、木の枝から飛び降りた黒巢は、すたすたと校舎の中へ歩いて行ってしまふ。

「ちょ、ナナ君!!」

その場に残された桃塚は、昼休みが終わるまで一触即発の二人を必死に宥めるはめになったのだった。

それから数日後。

養護教諭の笹川仁のもとに、後島光也から電話がかかってきた。

「仁師匠? ごつめーん、獲物逃がしちゃった。てか、また海外行っちゃったみたいなんですよねー。僕達も、これから追っかけます。一応師匠にも知らせとおこうと思つて……もしもし、師匠? 聞こえますか? あれー無視!」

耳元から聞こえる愛弟子の能天気な声に、仁はぐつたりと脱力する。

「光也、次会ったら覚悟しておけ」

「ええ! あ、もしかして、竹丸達使つて厳戒態勢なんかしいちゃった? あはは、師匠、心配性だなー」

「吐くまでしごいてやる」

「八つ当たり!」

電話の向こうにいる後島に怒りを覚えつつも、仁は内心ほっと胸を撫で下ろしていた。

心配事が、杞憂に終わってくれてよかった。

ハンターに追われる危険な吸血鬼が去り、要注意の愛弟子達も日本から去る。

「やっぱり紫織は俺に会いに来ないんだな」

「今隣にいますよー、代わります?」

「嫌だ」

電話口から、女性の声が聞こえてきた。

どうやらもう一人の愛弟子の機嫌はよくないらしい。

最強のハンターと呼ばれる彼女のことだ。またしても獲物を逃して不機嫌オーラ全開なのだろう。「今度は、仕事のついでじゃなく普通に会いに来いよ。んで酒でも飲もうぜ。紫織だけ奢つてやる」

「僕は!? いつもいつも紫織だけなんて最悪だよ!」

「おめーには拳骨をくれてやる」

「いりません!!」

忌憚ない愛弟子との会話に、仁の口元は自然と緩んだ。

警戒の必要な相手でも、可愛い弟子に変わりはない。

「じゃあな」と言つて電話を切ると、ほっと息を吐いた。

さしあたっての危機は去った。この一週間、昼夜問わず頑張った可愛い生徒達にも連絡を入れようと、仁は一度閉じた携帯電話を開いた。

「そういうことだったのですね」

ギクッ、とした。

あまりにも気が緩みすぎて、部屋に入ってきたヴィンセントの気配に気付けなかった。

ヴィンセントはスライドドアを静かに閉めると、仁に冷ややかな眼差しを送る。

「悪かったな。おめーさんが関わると事が大きくなりそうだったから、伏せさせてもらった」

苦笑して潔く白状するも、ヴィンセントの眼差しは変わらない。

「東間紫織のことは知っているだろう？」

「……ええ、もちろん」

ヴィンセントがかつて愛した女性の姪であり、ヴィンセントの命を狙っているハンター。

「アイツが今追っている獲物は、純血の吸血鬼でな、おめーさんとも関わりのある相手って聞いたから、知らせない方がいいと思ったんだ」

スッ、とヴィンセントが青い目を細めた。心当たりがある反応だ。

「それを知った私が、彼を助けるとしても？」

「いいや。ただ万が一にも、その彼とやらに会って『学園に近付くな』とか言わせたくなかったんだよ」

ヴィンセントが動くことで、東間達にはヴィンセントの弱点を知られなくなかった。

ヴィンセントは呆れたようにため息をつく。

「どんな関係と聞いたかは知りませんが、私と彼の仲はよくありません。……何より、私が

『学園に近付くな』と言えば、近寄ってくるような相手です。そんな者に、わざわざ会いになんて行きません」

後島から旧友と聞いていた仁は目を見開いた。ヴィンセントの言い方からして、むしろ彼とは仲が悪いようにも聞こえる。

「次は知らせてください。音恋さんは私が守ります」

クルッと踵を返し、ヴィンセントは青いリボンで束ねた白金髪を揺らして保健室を出て行った。

現在音恋から、完全に拒絶されているヴィンセントではあるが、彼女から離れる気はさらさらないらしい。根本的な問題が残っていることに疲れを感じつつ、仁は携帯電話のボタンを押した。

——この時、仁は忘れていたのだ。

現役最強のハンターと言われる自慢の愛弟子の追跡を振り切った獲物は、何十年もの間ハンターから巧妙に逃げのびている吸血鬼だということを。

愛弟子の言葉を鵜呑みにして、吸血鬼自身が彼らに海外に逃げたと思わせた可能性など微塵も考えなかったのだ。

「あはははっ！」

仁との電話を切るなり、後島は空港のロビーで人目も憚らずお腹を抱えて大声で笑った。

「師匠すんげー疲れてるっばい！ 次会ったら絶対にハゲてるって！ あはははっ！」

仁の疲れきった顔を想像して、後島はひいひい言いながら笑う。

「超効果顔面！ 獲物が昔住んでいた屋敷から学園はすつごい離れてるのに、竹丸達使って無駄に学園を警戒……ぶふっ！ おっかしー！」

一度は堪えたが、すぐに嘔き出した後島は、目に涙まで浮かべている。

そんな後島は、不審そうに彼を見てくる女性二人を目に入れた途端、表情を変えた。

「美しいお二人に出会えたことに、喜びのあまり涙が溢れました。きつとこれは運命……！ 僕とお茶しませんぐあー！」

気障な台詞を並べ立て、颯爽と女性たちをナンパしようとした後島だったが、後ろ襟を掴まれて引つ張り戻される。その間に女性二人は逃げてしまった。

「ちょ、紫織！ 一期一会を大切にさせてよ!!」

「もう少しで飛行機出るんだから、ふらふらサカってんじゃないわよ」

膝まで届きそうな紫色のストリートヘアーをした東間紫織は、不機嫌そうにぴしゃりと返す。目元が見えない真っ黒いサングラスをしていますが、彼女の不機嫌さがひしひしと伝わってくる。

しかし後島は彼女の不機嫌など気にも留めず、ニコニコと笑みを浮かべる。

「いい案だったね。紫織」

追っていた吸血鬼が、学園の近くまで来たなんて真っ赤な嘘だ。

全ては仁に“仕返し”をするために思い付いた悪戯だった。

実際には、ターゲットの吸血鬼は、学園からだいぶ離れた森の奥にある屋敷に向かったところまで掴めている。しかしそのあとの足取りが一向に掴めず、先刻海外に飛ぶ便に乗ったと情報がきた。

「甘いんだよ、師匠は。——甘い、甘い、甘過ぎる」

東間紫織は吐き捨てるように言った。「同感」と、後島も頷く。

笑みを浮かべている後島の目は、笑ってなどいなかった。

「生徒を守りたければ、モンスターを一掃すればいいのよ」

「師匠、まだあの雪女狩っていないみたいだしね」

「本当に甘い。モンスターに情を移すような人が、最強のハンターだったなんて笑わせるわ」

東間は、仁に対して心の底から激怒していた。

「僕達に隠し通せると思っているなんて、ホント甘いよねー。僕達を甘く見すぎ。子ども扱いはい加減やめてほしいよ」

後島は、怒りのオーラを纏って立つ東間に笑いかける。

「師匠が悪いのよ」

ニコリとも笑わず、東間は再び吐き捨てた。

サングラスの奥にある紫の瞳は、憎しみの感情を燃え上がらせている。

「ヴァインセント・ジェン・シルベルが学園の教員になった情報を隠すのが悪い」

仁達が何としても隠しなかった「ヴァインセントが学園の教員になった」事実、すでに東間達に知られてしまっていた。

仁が東間一族の復讐をよく思っていないことは知っている。だから念のために、独自の情報網を張っていたのだ。

学園に勤める教員の情報など、部外者でも探れる。だが、ヴィンセントが、忌むべき人間と共存する学園の教師になった理由まではわかっていない。

「どんな理由だろうねー？ ヴィンセントが人間に交ざるなんて」

「なんであれ——好機だ」

そこでやっと東間は笑みを浮かべた。

最強のハンターの名を継ぐ東間にとっては、些細な変化こそ貴重な好機。三十年にわたる一族の憎しみを背負った東間は、僅かな好機も逃さない。

けれど仁は、自分にヴィンセントの情報を教えてくれなかった。だから東間は怒り、獲物を追うついでに悪戯をしたのだ。

「まずはあの緑目の吸血鬼を狩ってからだ」

「そうだねー。あのムカつく野郎を狩ってから——ヴィンセント・ジェン・シルベル狩りをしようか」

最強の狩人は、獲物を狩る絶好の機会を、息を潜めて窺っている。

第二章 楽しむ

六話 予報は雨

放課後すぐに教室を出て、私はサクラと一緒に一階へ下りた。

約束の中庭に面した廊下へ行くと、窓から中等部の生徒会長、猫塚美海くんと副会長の猫塚美空くんが、笑顔で私達にマフィンを出してきた。

中等部の後輩である猫塚くん達は、綺麗な顔立ちをした双子さんだ。やや垂れ気味の大きな目と藍色に艶めく黒髪をしている。実は彼らもモンスターで、正体は猫又だ。

ゲームでは、脇役の私をきっかけにヒロインと交流を持つようになる立派な攻略対象。今のところ、サクラとの間に恋愛フラグが立つ気配は欠片もないけれど。

私とサクラは顔を見合せて、双子さんから貰ったマフィンにかぶりつく。チョコチップの入ったふわりとしたマフィンは、凄く美味しかった。満面の笑みを浮かべるサクラと一緒に、美味しいうちと伝えると、彼らは嬉しそうに笑ってくれた。

せっかくなので、私はマフィンを食べながら双子さんに部活に入ったことを報告する。

「ええー!? 音恋先輩、演劇部に入ったの!? すっごおい!」